

夜露?
(太陽光線が道を通り、夜水が乾く)
くさ → n.5
↑

? 職人
調理人

垂直の
天上へのパイプ
↓
天に生きた人々
↓
地に生きた人々
(1042年)

大王に、高い、深い詩を唱え上げよ、

〔彼の〕気に入る〔詩を〕、聞こえ高いヴァルウナに、

屠殺者が革を〔叩き伸ばす〕ように、

大地を、太陽のために敷き広げるべく、叩き伸ばした〔ヴァルウナ〕に。(五・八五・二)

木々の中に彼は空間を展げ伸ばしたのだ。

疾駆する力を競走馬たちの中に、乳を(曙色の)牝牛たちの中に、

心臓たちの中に精神の力(クラトウ)を、水たちの中に火を、ヴァルウナは

天の中に太陽を、ソーマを岩山の中に、置き定めた。(二)

口を下に向けた〔水〕袋を、ヴァルウナは

天地に、空間に、流しかけたのだ。

それによって、あらゆる世界の、王は、

大麦を雨が〔濡らす〕ように、地面を広く濡らす。(三)

〔ヴァルウナは〕地を、大地と天を濡らす、

ヴァルウナが搾られた〔乳〕を望むと、そのたびごとに。

山々は雲を伴ってすつかり身を纏う。

力を誇示する勇士らは自らを緩め放す。(四)

さてまた、聞こえ高い、アスラに属するヴァルウナの、

この、偉大な幻力を、私は(ここに)明言する、

計測能力

敷その(とする)法に

s.d. 張り展げた目

yavam na vstir

「nava」? → iva pps
た 11421

インド19世紀の社会制度神
聖に於いては
印欧祖語時代の要素:
priya-
ni-ya- "Arana-

von Felle 1)
vi-han (vgl. SB II 4, 110 & JB III 16 usw.)
→ WITZEL bei WEZLER St 23 8/9 p. 155
あまの「張りあがる」がエカ
インドラカハススの頂を 409928 IV 194

定規を用いたかのように、空間の中に立ちながら、
大地を太陽によって自ら測り分けた（ヴァルウナの）。（五）
さて今（まで）、最も優れた見者である神の、
この、偉大な幻力に、誰ひとり挑もうとしなかったのだ。
たった一つの海を、彩なす諸々の川筋が、「水を」注ぎ込みつつも、
水で満たすことがないという（幻力に）。（六）
アリヤマンに属する（同僚）であれ、ヴァルウナよ、ミトラに属する（同僚）であれ、
いつも一緒の同僚であれ、兄弟であれ、
部族の（仲間）であれ、ヴァルウナよ、うちの者でもよその者でも、
その人に対し我々が罪過を為したならば、その（罪過）を解き緩めるがよい。（七）
ばくち打ちたちが賭博で糊塗した（ごまかした）かのような（罪）、
たとえ真実（そのとおり）である（罪）でも、また我々が知らないでいる（罪）でも、
それら全ての（罪過）を、緩いものごとくのように、解き放て、神よ。
そうして我々は、ヴァルウナよ、おまえにとつて好ましくありたい。（八）

- (1) 「詩」と訳したのはブラフマン。
天(石)に根を穿てる
- (2) 太陽のために路を「削り」開いた、という表現もある。
[2]
- (3) 木々が枝を広げて空間を占めるといふ本性を言うものである。
→ chūti [dhānāḥ → nyagrocka]
- (4) 「リグヴェーダ」では他の箇所でも、水の中に火があるとされる。水で消火したり、焼石など

罪(微罪)
君の
仲間であらう
縄とエルメル

日時計の側から太陽の運行を捉えている
も勇氣と持っていない、
ヴェーダ 20

OLDENB. ←
Rel. Ved. 2 113
(7) FINNY

土地の讃歌のイメージ
 象徴的イメージ

MERKELBACH 321 A66.72

Mit Braut des "Parsifal" (!) → 9070
 A5vin

cf. THIEME Gedicht
 P.54 n.3
 OLD Rel. Ved. 777 113f.

を水に入れて煮炊きをする場合、火そのものがなくなるのではなく、水の中に移行すると考えたことに基づく、とする解釈がある。

(5) 「水の入った」革袋（または樽）を流す、注ぐ」とは容器いっぱいの水を注ぐ意味。

(6) 暴風雨は若い神々の勇士、マルツトたちが戯れ暴れるのである。

(7) マーヤー。この両詩節に見られるように、マーヤー「不可思議な能力、幻力、幻術、手品」は

「測る」という意味の動詞語根から作られた抽象名詞で、原義は「測ること、算術・計算・設計など

の抽象的思考能力」である。それが特殊な人々の専有であった社会状況下では、恐ろしい力と思わ

れたのであろう。

(8) 契約・同盟関係にある異部族の構成員が客人として来た場合、自分たちの部族員と同じ待遇で

もてなすことが義務づけられていたらしい。これを中心とする部族の慣習法とその保証を神格化し

たものがアリヤマンである。アリヤマンが結婚式の重要な神であるのは、婚姻関係がこのような部

族間で結ばれたからであらう。ここではそうした客人か、姻戚関係に基づく仲間が意図されてい

う。

(9) ミトラは普通名詞で「契約」を意味し（後に「友」も）、契約・和約とその保証を神格化した神

の名でもある。ここではおそらく契約・同盟に基づく仲間（例えば、共同で遠征・掠奪・取引に出

かける、参加するなどの場合）の意味であらう。

(10) 「罪過を解き緩める」というのは、罪過の結果・潜勢力を本人から解放・脱落させることであ

う。次節参照。

4
夜の太陽

詩人ヴァアスイシユタの個人的体験を基に、幻影や神との個人的な交流が語られる点で、ウェーダの宗教では極めて異色な、独自性の強い一篇である。根底にあるのは、沈んだ太陽を再び昇らせるための、讃歌による魔術である。ヴァアスイシユタがヴァアルウナの心に叶う歌を捧げてはじめて、太陽が再び昇り規則正しく運行することが可能になる。後のアグニホートラに連なる祭式の原初型が想定される。夜の太陽については複数の神話が語られているが、その中に、昼間、天空上の軌道を戦車に乗って移動した太陽が、海または岩山の中に沈み、夜には（地の涯の）海を西から東へと船に乗って渡り戻る、とするものがある。（この際、沈んだ太陽を船上に救助して導くのは宵の明星で、アシユヴィン双神の一方、ナーサティヤがそれであったと考えられる。）太陽の運行を定めたのはヴァアルウナであるが（本章3の第一節と第五節参照）、ヴァアスイシユタはヴァアルウナの特別の愛顧を受けてこの秘密にあずかり、夜の太陽を運ぶ船に乗せてもらう。ヴァアスイシユタには後の文献でも魔術師的性格が見られる。各部分の時間構成については解釈が難しいが、それにもかかわらず、用語法は生き生きしている。形式面でも、接続法の多用、完了語幹の接続法と願望法など、珍しい語形や用法の多出する点が注目される。

綺麗⁽¹⁾な、（ヴァアルウナの）最も気に入る（自分自身の）考えを、報酬を恵む
ヴァアルウナに、ヴァアスイシユタよ、捧げよ、

cf. KUIPER *Anc. Ind. Cosm.* 74 (朱)

ヴェーダ 22

dieses Feuer war
m-sprüngl. Agni-Varisvānara
(→ X 88, 5. 6) ?
vgl. vor allem VII 5 VII 6
vgl. KRICK 225⁵⁶⁵

durch das Leitwort der Rede
(dem entlog) preisende Sänger
(= der Preisende)
= Agni 2, 2

↳ SB II 3, 4, 5 (217-7' I 260)
śāsvad dha vai nōdigād yād
asminn etām ākūtim nā jrebhuyāt.
tāsmād vā etām ākūtim juhōti.

RV I 113, 17 syūmanā vācā id iyarti vāhni
stāvāno rebhā usāso vibhātih "Mit dem Leitwort
der Rede treibt als 'Lenker der preisende Sänger alle
-erglänzenden Morgenröten ans" SE; (F) 'du fährst/bringst du/
RV IV 53, 6 stāvītā 'man möge preisen' VIII 23, 6 stāvīmahi

sollte?
(wollen e)

(7)

1/3時

彼が、かの崇拜すべき者をこちらへ差し向けるように、千の能力を備えた、丈高い偉丈夫（太陽）を。（七・八八・二）
彼（太陽）の全貌に出会って、今はここに、

私は、アグニ（火）（神）の面をヴァルウナの（面）だと思ふ。

太陽光が岩の中にあり、暗闇が、他方、守護者である時

〔彼はその時〕私を偉観へと、見るために、どうしても連れて行ってほしい。（二）

ヴァルウナと二人で、私たちが船に乗り込むであろう時、

私たちが海の中央へと（船を）進めて行くであろう時、

私たちが水たちの背の上を通って、動いて行くであろう時、

私たちはぶらんこの上で揺らしあうであろう、美しく輝くために。（三）

ヴァスイシユタをヴァルウナは（現に）船に乗せたのだ。

リシと成したのだ、働き優れた（ヴァルウナは）、諸々の能力によって、

讃歌を唱える者と（成したのだ）、（靈感に）震える（ヴァルウナは）、日々が良き昼間を持つというこ

とに關して、

諸々の昼が今や続いていくであろう限り、諸々の曙が〔続いていくであろう〕限り。（四）

私たち二人の、あれらの仲間関係はどこへいつてしまったのか、

以前だったら、狼（心）なく、共に歩んでいたものなのに。

高い建物へ、ヴァルウナよ、自ら決定する者よ、

（決定を自らする者よ）

つき従ったものなのに

↓つまり Var の能力
のあり限り

危険な能力

仲間をつくるイミダ

狼 = 我々、
狼 = 我々の一員?
→ cf. FALK?

過ぎり願望・未来

(Indra — 移動の神
Rudras — 定住の神)

→ 「唯一の神」

Vasistha. (~ Zarathustra ??)

家の歌

Indra 定住の神 (移動の神)

仲間

同僚として

同じ部族の一員でありながら、

部族に属する仲間でありながら、

仲間の
生活環境

千の扉をもつたおまえの家へ、私は出かけたのだ。(五)
身内の友が、ヴァルウナよ、(おまえに) 気に入られていながら、
おまえの仲間が、おまえに対して罪過をなすであろうならば、
私たちが罪ある者として、おまえに対して、おそるべき者よ、償わないでよいように、
(靈感に) 震える(おまえは)、讚美する者に、いつも庇護を授けよ。(六)

この堅固な定住地に定住しつつ、おまえに、(我々は願う)、
アディテイの膝の上から支援を獲得しながら、

「我々から、ヴァルウナは、捕縄を解き放つてしまいがよい。」
おまえたち(神々)は、諸々の安寧によって、常に我々を守れ。(七)

(1) 本来「綺麗好き」の意味で、からだの身繕いをする「水鳥」の意味で用いられることが多い。
「手入れの行き届いた、純粹・清潔な」の意味であろう。

(2) 「考え、思考」とは、すなわち、以下のことば、詩。この第一節はヴァスィシュタの自分自身
への呼びかけ。

(3) おそらく、日の出とともに、の意味であろう。「靈感あるヴァスィシュタの者たちは、曙に対
して、歓迎の讃歌を伴って(今) 最初に(誰よりも先に) 目覚めた。」(七・八〇・一) 参照。

(4) 点ぜられた祭火の中に神の姿を見るのである。ゾロアスター教でも祭火にアフラ・マズダーの
姿を見る。

(5) 地下にある夜の太陽。それを次には「偉観」(驚くべき姿)と呼ぶ。

(6) 他の関連箇所(七・八七・五)では太陽を意味している。そこでは、マハーヴラタと呼ばれる

保て
こころ

5

5

ばくち打ち

- 祭式でホトリ祭官がぶらんこに乗る儀礼と結び付けて解釈され、夏至（または冬至）に、太陽の運行に勢いをつける模倣儀礼の存在が推定される。
- (7) 「リグヴェーダ」の詩を作る（「見る」）ことのできる靈感ある詩人すなわち祭官。
- (8) 夜空の星を穴（扉、門）と考えたものか。
- (9) 「他人によつて為された罪は償うにあたらぬ」旨のインド・イラン共通時代に遡る法律条項を改作した表現。
- (10) ヴアルウナを先頭とするアーディティヤ神群の母とされる。「無拘束、自由」が原義。
- (11) 最後の一文は「リグヴェーダ」第七巻を伝えるヴァスイシュタ家のリフレイン。

賭博はシュラウタ祭式にも組み込まれており、「マハーバーラタ」でも大戦争の発端を開く重要なプロットをなす。太古、祭儀的あるいは制度的役割をも担って、「ことばによる戦い」同様、部族間の紛争決着などにも用いられたのかもしれない。この讃歌に見る賭博は世俗的なもので、「リグヴェーダ」には珍しく、我々にも共感を呼び起こす人間味ある内容を含む。具体的方法は不明であるが、多数（ここでは一五〇）のヴィビダーカ（セイタカミロ balan）という木の実を用いる。何らかの仕方を得られた実の数を「目」（テクシヤ）と呼び、これが四で割り切れる場合が最強のクリタ（できた）、一つ余るのが最悪のカリである。便宜的に「目」を「さいの目」と訳した箇所もある。本書第

「賭博の実」とすべきか

高い〔木〕に〔揺れる〕耳飾りたちは私を陶酔⁽¹⁾させる、

吹きさらしの場所に生まれた彼らが窪み⁽²⁾の中を転げ回っている時。

ムジャーヴァット〔の山〕に産れるソーマの味わいのように、
ヴィビーダカは私には目覚めて見えたのだ。⁽³⁾（一〇・三四・一）

彼女のほうは私を罵りもしなかったし怒ることもなかった。

仲間にもまた私にも優しかった。

一つ多すぎた目が原因⁽⁴⁾で、私が

忠実な妻を遠ざけたのだ。（二）

姑は憎んでおり、妻は〔私を〕遠ざけている。

窮地に陥った者には同情者は見当たらぬもの。

売りに出された歳とつた馬同様、

ばくち打ちの使い道など私には見当たらない。（三）

他の者たちがその男の妻に手をつける、

（競走馬の）疾駆する力もつさいの目が、その男の財産に欲望を起こした〔時には〕。

父、母、兄弟たちは本人について言う、

『私たちは知らない。おまえたちは縛ってこの者を引いて行け。』（四）

これら（木の実）を使つて（もう）賭けはすまい、と心に決めると、去り行く仲間たちから私は取り残される。

撒き入れられた茶色の「木の実たち」がことばを発した途端、

私はもう彼らとの逢い引きの場所へ向かつている、愛する男をもつ女のように。（五）
ばくち打ちはサバー⁽⁵⁾に向かう、

「私は勝つたろうか」と自らに問いつつ、身を幾たびも膨らませながら。

さいの目たちは彼の望みをやり過⁽⁶⁾ごさせてしまう、

賭けの相手にクリタを定めながら。（六）

さいの目たちとは引っかけ鉤をもち、棒で追い立て、

服従させ、熱し、熱で苦しめるものである。

子供（騙し）の贈り物をもち、勝っているものを再び打ち負かす。

〔彼らは〕ばくち打ちによって、蜜としつかり混ぜ合わされている。⁽⁷⁾（七）

五〇の三倍からなる彼らの一団は戯れ踊る。

鼓舞する神（サヴィトリ）のごとく、真実⁽⁸⁾を本性として。

強力な者の怒りにさえ身を屈することはない。

王さえも彼らには敬意をこそ捧げる。（八）

下方へ転がり、上方へ跳ねる。

手をもたずに手をもつ者を征服する。

天に属する炭として窪みに撒き入れられると、冷たいのに、彼らは〔人の〕心を焼き尽くす。(九)

ばくち打ちの妻は見捨てられて悩む、

いったいどこを歩き回っているのか〔解らない〕息子の母も。

〔彼は〕負債を負い、恐れながら、財を望みつつ、

他人たちの家に夜近づく。(一〇)

女を見ると、ばくち打ちを苦悩が襲った、

他人たちの妻と、良く作られた居間とを〔見た時〕。

午前には褐色の馬たちを〔自分の車に〕繋いだのだった。

その彼が、火の脇で、下男に身を落とした。(一一)

おまえたちの偉大な一群の、指令官、

一団の王、代表者となった者、

彼に対し、私は差し伸ばす——「私は財を止め置くことはいたしません」——

十〔の指〕を。それを私は真理として述べる〔誓う〕。(一二)

さいの目で賭けるのをやめよ。〔自分の〕耕地をこそ耕せ。

〔自らの〕財産に安んじよ、大切に思つて。

そこに牛たちがいる〔ではないか〕、ばくち打ちよ。そこに妻がいる〔ではないか〕。

そうサヴィトリは私にはつきりと告げる、この、部族の掟を護る〔神〕は。(一三)

和約をおまえたちは結んでくれ。私たちを憐れめ。

私たちに恐ろしい「呪い」を用いて大胆にも呪いをかけるのをやめよ。

おまえたちの怒りは、もはや鎮まれ、「おまえたちの」そねみは。

他の者が今度は褐色の「さいの目」たちの突撃の中にあれ。(二四)

(1) 賭博に用いられるヴィビータカ樹の実。

(2) 木の実が撒き入れられる賭博用の穴。

(3) たくさんの実、すなわち「目」をつけているから。さらに、「生き生きと」の意味で、ソーマの効用のひとつである睡眠を遠ざける興奮作用にことばを懸けている。

(4) すなわち「カリ」。

(5) ここでは「集会場、賭場」ほどの意味であろう。

(6) 一番強い手。

(7) ばくち打ちは、自分で、賭博の木の実たちを抗しがたい甘い飲料(誘惑)にしたててしまう、という意味か。所有格の後の時代の用法をここに見てよければ、単純に、「ばくち打ちにとつては」と訳せる。

(8) サテヤ。現実に実現する性質・力。

(9) 一〇―一は自分の家庭を顧みず(そうすることができない身になってしまい)、他人の家に使用人として雇われ、夜警のような身分で暮らしを立てる意味か。「下男」と訳したのはヴリシヤラ。一〇の最終行は普通は「盗みに行く」と解釈される。

(10) 「彼に対し両手の指を差し伸ばす」のは、手に何も隠し持っていないことを示して、誓うのであろう。全体の意味は、さいの目に対して、財産を隠し持っていることはできない、全てを失って

6

巨人の解体

- しまう、ということか。
- (11) 鼓舞し教令する作用を神格化した機能神。第八節参照。
- (12) 「さいの目」ないし賭博のもつ呪縛するという本性、呪縛力の総量そのものは変わらないと考
え、それが他人に向けられるように、という思考法である。

宇宙創造の讃歌六篇（いずれも第一〇巻）の中の一つで、世界の始源と統括する最高原理をめぐる議論が話題となってきた時代環境を反映している。「リグヴェーダ」では初めて、後のバラモン教会の基準となる四つの階級（ヴァルナ、色）が列挙され、おそらくこれが主要因となつて、後世の正統文献に大きな役割を演ずることになる。プルシャは普通名詞としては「人、男」の意味。背景にあるのは、太古から民間に伝えられていたであろう（北欧神話のそれに類似性が指摘される）巨人解体神話である。「リグヴェーダ」の伝統的作風の中では扱われなかつた材料が、新たにこの時代の一詩人の手によつて取り上げられたものと考えられる。何らかの形で祭式用に加工されているということが、新しい題材・作品を「リグヴェーダ」に組み込むことを可能にしたと推定されるが、この場合には、巨人の解体が犠牲祭の場に置き換えられている。このことはまた、祭官たちを取り巻く環境が古典シユラウタ祭式の時代へ向かつて移行しつつあることを暗示している。

dis ~ arigula

→ 10の方角
と示唆 (純子)
→ 5cd

アツ人の「松原」志向
Invations / Kolonisation
Zionbücherei < (緩)

分

「人」は千の頭をもち、

千の眼をもち、千の足をもつ。

彼は地をあらゆる場所を覆い、

十指分はみ出して立っていた。(二〇・九〇・二)

「人」こそが、生じたところの、そして生ずべきところの、

この一切(の支配権)をもつ。

そして不死性を支配している、

彼が食物によって「日々死を」越えて成長していく時。(二二)

彼の偉大さはこれだけ(全部)である。

これよりさらに「人」は強力でもある。

彼の一足(四分の一)はあらゆる諸存在であり、

彼の三足を成す者(四分の三)は天上における不死である。(三三)

三足(四分の三)をもつて「人」は上方へ上がっていった。

彼の一足(四分の一)はここに再び生じた。

そこから彼はあらゆる方向へ向かって歩を進めた、

食するものと食さぬものとの両者の上へ。(四)

彼からヴィラージ¹が生まれた。

ヴィラージからは「人」が。

であり、

格上でもある。

(法0?) 解釈
= yajña: vira
cf. SB XIII 6, 1, 2
annarūpena
(Yajñ Smṛ III 120)

* śānas 二
定動詞的。解釈は。 Sretap III 13? 2? (dnt 4511: 20RV enc)
cf. 定動詞的。Aind
Part. Perf. (Pāṇ. III 2, 107, cf. THIEME KZ 78 94), 本は śānas 二
アツから現在語幹の分詞である。

fessel! あとは「支配している[者]、支配者である」
に対する。 cf. 1847?

→ と支配している[者]である、
also 独立は形容詞の2つある

彼は生まれるやいなや地に余った、
後方でも、それから前方でも。(五)

「人」を供物⁽²⁾として神々が

(自分たちのために) 祭式を繰り広げた時、

春がバター⁽³⁾であった。

夏が焚木⁽⁴⁾、秋が供物⁽⁵⁾(であった)。(六)

彼を祭式⁽⁶⁾(そのもの)として敷き草の上で彼らは水で濡らした、

太初に生まれた「人」を。

彼を用いて神々は(自分たちのために) 祭式を行なった、

サーダイヤ⁽⁷⁾(の神)たちと聖仙(リシ)たる者たちとが。(七)

「人」の⁽⁸⁾ 全身を供物に捧げる、その祭式から、

斑バター⁽⁹⁾が調達されていた。

彼(「人」)はそれを(自分で) 獣たちに作り成したのだ、風に住む⁽⁹⁾、

原野に住む(獣たち)に、そして村落に住むところの(獣たちに)。(八)

全身を供物に捧げるその祭式から、

リチュ(讃歌)たちとサーマン(歌詠)たちが生まれたのだ。

韻律たちがそれから生まれたのだ。

ヤジュス(祭詞)たちがそれから生まれた。(九)

(2) いろいろもの

それから馬たちが生まれた、

あらゆる、(上下) 両列の門歯をもつものたちも。⁽¹⁰⁾

牛たちがそれから生まれたのだ。

それから山羊・羊たちが生まれていた。(二〇)

彼らが「人」を分割しおえた時、

幾つの部分に作り変えたのか？

彼の口は何、両腕は何、

両腿は何、両足は何と言われているのか？ (二一)

祭官階級の者(プラーフマナ、婆羅門)が彼の口であった。

両腕は王族の者(ラージャニヤ)⁽¹¹⁾となされた。

庶民(ヴァイシヤ)なら、それは彼の両腿である。

両足からは隷属階級(シュードラ)が生まれた。(二二)

月が思考から生まれていた。

視力から太陽が生まれた。

口からインドラとアグニとが。

息から風が生まれた。(二三)

臍からは空界が存在していた。

頭から天が転現した。

くの類

両足から地が、諸方角が聴覚から。

そのように彼らは諸世界をしつらえた。(一四)

彼のパリデイは七つあった。

七の三倍の焚木が作られてあった。

神々は祭式を繰り広げつつ、

「人」を〔犠牲〕獣として〔祭柱に〕縛り付けた。(二五)

祭式(=「人」)を用いて神々は祭式(=「人」)に(自分たちのための)祭式を捧げた。

それが最初の(世を維持する)諸秩序(ダルマン)であった。

それら偉大さは蒼穹に(常に)付随している、

そこに太古の神々サーデイヤたちが(今)いるところの。(二六)

(1) 「輝きわたる」あるいは「広く(または、分かれて)支配する」を原義とする女性原理。本書第三章3注14を参照せよ。

(2) つまり犠牲獣。

(3) 祭火の中へ注がれる献供用のバター。

(4) 祭火に用いる焚木(木片、枝)。

(5) 「秋」であるから献供用の穀物であろう。

(6) 一群の神々の呼称。原義は「成功にかかわる、成就する、目的にかなった、正しい」。性格ははっきりしないが、神々の誕生以前に存在していた神々として、主に創造神話に登場する。第一六節参照。

Hadort Nare *raojar-paramia-* (Duchene-Guillemin La Religion de l'Iran ancien 335, I, 177-78) 「世界宗教史 I」302

- (7) サルヴァフット。普通は犠牲獣のからだの一部、それも人の食用には重要でない部分を捧げることが、特別な場合には全身を捧げた。ギリシアの祭式でいうホロコーストにあたる。
- (8) 酸乳を加えた献供用のバター。コロイド状の姿から原初の質料にあてられたのであろう。
- (9) 鳥たち。
- (10) 当時の動物（家畜）の分類法で、馬の仲間を意味する。
- (11) クシャトリヤ（「支配（権）に関わる」の意味）と同じ。
- (12) 祭火の周囲を「取り囲む」、境界を仕切る木片。

一、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、
 十、

一、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、
 十、